歴史館だより

山形市指定有形文化財「猿曳駒図」（三面のうち「C」）

- 最上家信奉納の猿曳駒図絵馬について
- 土井利勝家臣時代の鮭延越前と新関因幡
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.9
- 最上義光連歌の世界③
- 研究余滴⑱「京都から連歌師グループが来た」

※本号をもちまして配布を終了いたします。
次号からは最上義光歴史館のウェブサイトを通しての配信になります。

No.26
2019年3月発行
最上義光歴史館

最上家信奉納の猿曳駒図絵馬について

佐藤　琴

山形大学附属博物館は平成三十年度公開講座として、「山形大学の最上義光研究」を開催した。山形大学には、歴史学はもちろんのこと、建築史、文学史、美術史など、さまざまな観点からの最上義光研究が蓄積されている。その成果を市民に還元すべきと考えたからだ。日本美術史を専門とする筆者も「最上家ゆかりの絵画」と題して、一コマを担当した。その準備過程で筆者は山形市指定有形文化財「猿曳駒図」〈日枝神社（山形市香澄町）蔵〉を調査する機会を得た。本稿は調査において得られた知見を報告するものである。

猿曳駒図Ａ

猿曳駒図Ｂ

最上家信（一六〇六～三一）は最上義光の孫、父家親の突然の死により十二才で家督を相続したが、六年足らずで改易された、山形藩における最上家最後の藩主である。家信の足跡を記す資料は少ないが、家信が奉納した絵馬が山形に二件現存していることに加えて、重要文化財に指定されている伝狩野宗秀筆「遊行上人縁起絵巻」〈光明寺（山形市七日町）蔵〉を、死去の直前である寛永八年（一六三一）七月十五日に再奉納するなど、山形の近世絵画史を語るうえで見逃せない人物である。「遊行上人縁起絵巻」については、松尾剛次氏が、最上義光が光明寺の本丸から東大手門前への移転という慶事に合わせて文禄三年（一八五九）に奉納したが、火災などで光明寺が無住となり、最上家に戻されていたものを、新住持の着任後初めて迎える盆であり、義光の十七回忌に再度奉納したものであるとしている（「光明寺本『遊行上人縁起絵』をめぐる謎を解く」『歴史館だより』二十一　二〇一四年）。また、家信が奉納したと伝えられる天童市指定有形文化財「神馬図」〈愛宕神社（天童市北目）〉については、宮島新一氏が家信の動向を伝える数少ない記録を分析し、元和四年（一六一八）午（うま）年の奉納説を提示した（「最上家信奉納の神馬図」『歴史館だより』十七　二〇一〇年）。その論のなかで「猿曳駒図」が元和六年（一六二〇）の申（さる）年に奉納されたことを引き合いに出している。しかし、それ以上の言及はない。何故ならば、ある意味では「猿曳駒図」には問題点がないからである。

「猿曳駒図」（以下「本図」と称す）は、一辺が約二十六センチのほぼ正方形の三枚の板に、馬具を装着した馬と二本脚で立つ猿が描かれている絵馬である。背景には金泥が塗られており、馬と猿を避けて、三枚それぞれに「おさめたてまつる馬形壱疋　元和六年十月十六日　家信」の墨書がある。別の記録からもこの年に家信が山形に居たことは判明しており、在国中の奉納であることがわかる。

また、渡辺信三氏によれば、本図が奉納された日枝神社は、斯波兼頼が山形城築城した折、近江国坂本（滋賀県大津市）の日吉大社を城内に分祀したものであり、家信が本図を奉納した時には二の丸にあったという（渡辺信三『やまがたの絵馬』やまがた散歩社　一九八五年）。渡辺氏は家信の苦境から、本図は御家安泰を祈願して奉納されたものだとし、「部下に対しいかに所領をあたえ、懐柔して、忠勤に励むようにさせたか、三面の絵馬は暗にそれを表現している」と述べた。本稿ではこれらの論を踏まえ、これまで言及されてこなかった美術史的観点、特に猿と馬が意味することについて検討していきたい。

まず、絵馬とはその名のとおり、馬を描いた絵のことであり、生きた馬を神に奉納する習俗が絵によって代用され、発展したものと推測されている。室町時代末期から徐々に馬以外の画題が絵馬に用いられるようになったことが数少ない遺品からわかっている。

次に、馬とともに描かれた猿についてである。猿は馬と関係が深い。由来は中国であるが、平安時代から良馬の飼育のために厩に猿を飼うことが行われていたという。猿が厩につながれている様子を描いた「石山寺縁起絵巻」（鎌倉時代）、「厩図屏風」（室町時代）などの絵画もある。また、猿は日吉大社において神の使いとされている。日枝神社に猿と馬を描いた絵馬を奉納することは不思議ではない。しかし、本図に込められた意味を最上家の問題から読み解く前に、猿と馬が描かれた他の絵画を検証すべきであろう。

そもそも、中国で生まれ日本にもたらされた「花鳥画」と総称される動植物を描いた絵画は、花や鳥に吉祥の意味を込めて制作されたものである。馬

と猿の組み合わせでは「馬上封侯」という絵がある。「馬上」とは「すぐ」という意味、「猿猴」は「候」と同じ読みであり、「(諸)候に封じられる」ことを表している。つまり、「昇進祈願」の画題である。この場合、猿は馬の上に乗る姿で描かれることが通例であり、本図はあてはまらない。

他の画題を探してみると「意馬心猿図」と呼ばれる一群があった(岩井宏実『ものと人間の文化史　絵馬』　法政大学出版局　一九七四年)。「意馬心猿」とは仏教用語であり、『大辞林 第三版』によると「妄念や煩悩が激しく、心の乱れが抑えられないのを、奔馬や野猿が騒ぐのを抑えがたいさまにたとえた語」であるという。作例としては清水寺(京都府)にある二面が重要である。狩野元信の筆と伝えられる絵馬は金地に杭につながれた馬とその綱に手をかける猿が描かれており、金地の本図(「馬曳駒図」)と近い。また、「寛永拾四年(一六三八)」の年紀と「山雪」の印章がある絵馬には、どこかにつながれた手綱をピンとはり、前脚をあげる馬の腹巻に猿が描かれている。絵馬における「意馬心猿」という画題がどこまで遡るかは明らかにすることはできない。しかし、逆に言えば江戸時代前期の作とみられるこれらの絵馬が存在することにより、本図が元和六年(一六二〇)の申(さる)年に家信によって奉納されたことを疑う必要はないといえるだろう。そして、本図は日枝神社の神の使いである猿によって、御しがたい煩悩を抑えるという「意馬心猿」を踏まえた作品であると考えるべきである。

次に検証すべき点は三枚一セットであることの意味である。渡辺氏が指摘するように、本図の上部には釘穴が二つあり、どこかに打ちつけられていた。しかし、それが奉納時のものかは断言できない。同じく三枚がどのように配置されていたのかも不明である。褐色の液体による汚れがあるが、それも奉納時の配置を復元する決め手とはならない。そもそも三枚一セットであったのか、という点も確認が必要である。『山形市史　別巻二　生活文化編』(一九七六年)などに掲載されている図版の配置で、左からA、B、Cとし、画面について詳しくみていこう。

Aは頭を向かって左に向けた馬を描く。猿は手綱を握って馬の顔を見つめている。Bでは馬は向かって右に頭をむけており、その右側に猿がいる。猿のまえに頭を垂れ、猿は馬の首を撫でている。Cの馬は、体を左に向けているが、頭は右を向いている。その右側に馬の手綱を手に右に向かって歩き出そうとしている猿が、振り向いて馬の顔を見ている。

渡辺氏の指摘するように、この三枚は物事の推移を表している。馬と猿が出会い、神の使いである猿に諭され、神馬として歩みだしていくようすを描いたものだろう。この推測を補強するものとして、馬の鞍と髭の描写をあげたい。まず、AとBとでは鞍に布がかけられている。しかし、Cには布がなく、金蒔絵が施された鞍が描かれている。もう一つは馬の髭である。AとBの馬の口の周りには髭が描かれている。しかし、Cには髭が描かれていない。鞍もA、BとCでは異なっていることから、Cに髭を描き忘れたと見ることはできない。また、馬の色が違うことから、同一馬によるものではないと考える向きもあろう。しかし、近代以前の東洋絵画において、物事の推移を複数の動物で表す場合に動物の毛色を変化させるのは不自然ではない。例として禅の修行を「逃げた牛を飼いならす過程」で表した「十牛図」(北宋に成立)があげられる。作例として著名な伝周文筆「十牛図」(相国寺蔵)に登場する牛たちの毛色は同一ではない。

Aの馬

Cの馬

そして、小型絵馬の三枚一セットでの奉納については興味深い事例がある。東寺の正御影供の日に灌頂院の閼伽井に掲げられる朱一色の馬の絵馬である(岩井前掲書)。中央が本年、右が昨年、左は一昨年を表しており、弘法大師が描いたとされる馬のかたちを比較して、その年の作物の出来を占うという。現在も行われているこの行事と本図と関係については資料が探せていないが、本図が奉納当初から三枚一セットであり、物事の推移を表している可能性は高い。

以上、「猿曳駒図」について美術史的な考察を行い、画題は「意馬心猿」であり、三枚一セットで物事の推移を表していることを指摘した。神の使いである猿によって欲望を抑える、つまり、最上家信が善政を行うことを祈念した奉納であったことはいえるであろう。

Cの鞍

(山形大学学術研究院　准教授)

土井利勝家臣時代の鮭延越前と新関因幡

早川和見

はじめに

元和八年（一六二二）最上家のお家騒動後、同家重臣鮭延越前秀綱と新関因幡久正両名は、当時の老中土井利勝に身柄を預けられたが、翌同九年には晴れてご赦免となっている。その際鮭延秀綱には、二代将軍秀忠から次男忠長の附家老への招聘を打診されたというが、当の秀綱はこれを固辞したと伝えられる。この秀綱の固辞理由は不詳のままである（拙論　最上家改易事件に関する一考察　野木神社秘蔵史料を中心として　古河郷土史研究会　第三一号　一九九三年）。その後鮭延、新関両氏は老中土井利勝に預けられた所縁で、元和九年にそのまま家臣として召し抱えている。今回は土井利勝家臣時代の鮭延越前と新関因幡について若干考察を試みたいと思う。

元和九年当時土井利勝は佐倉藩主知行高六五二〇〇石で、当時の家臣団分限帳は伝存していない。しかし主要家臣団の顔ぶれや知行高などは、近年ほぼ明らかとなってきている。主要家臣について知行高一〇〇石以上は一三〇名前後、大身者では御城代土井内蔵允元政三〇〇〇石（藩主利勝の同母弟）、筆頭家老寺田與左衛門時岡二〇〇〇石の二氏のみで、他は三〇〇石未満の小身者達であった（拙論　土井利勝研究ノート(7)　老臣寺田與左衛門について　古河郷土史研究会　第44号　二〇〇六年）。

土井利勝家臣時代の鮭延越前と新関因幡

このような現状を背景として土井利勝は鮭延越前と新関因幡の両氏を、何石で召し抱えようとしたのであろうか。これについては、鮭延越前へ三〇〇〇石、新関因幡へは一〇〇〇石であったと思われる。これが当時の利勝の知行高からみても目一杯の知行高であることはほぼ確実である。そして利勝は、この禄高を鮭延、新関両氏に公式に提示前に、将軍秀忠に打診したのである。これについて将軍秀忠は新関因幡への一〇〇〇石はすぐに了承したが、鮭延越前への三〇〇石については難色を示し、当初から五〇〇〇石を給するように、さらに召し抱えるに伴い五〇〇〇石加増を利勝へ指示している。恐らく秀忠は利勝に対し、現知行高では五〇〇〇石の捻出が困難であることを考慮しつつ、将軍家としても近い将来に一四、五万の大身の大名へ取り立てる意向を内密に伝えていたものとみられる。鮭延越前への五〇〇〇石は、事実上将軍秀忠が給したものである。これにより鮭延氏は、俄かに利勝家中における禄高最高位となったのであった（寛政重修諸家譜　土井家部分　土井系図乾　国立公文書館内閣文庫）。つまり二代将軍秀忠、幕閣の土井利勝等が、最上家浪人鮭延越前と新関因幡の両氏について極めて高い評価をしていたことが古河藩土井家史料により明らかなものとなっている。

実はこれと同様に、戦国武将鮭延越前が当時の将軍家や幕閣が高く評価して描いた軍記物に『奥羽永慶軍記』がある。このことで筆者は、出羽の軍記物に造詣の深い鶴岡市の歴史家佐久間昇氏に直接尋ねたところ『作者の戸部正直は、在野の歴史家であるものの水戸徳川家二代藩主光圀とも親交があり、大日本史編纂中であった同藩彰考館にも出入りを許されており、鮭延越前と将軍家との情報も水戸徳川家から入手した可能性が高い』とのことであった（佐久間昇　出羽戦国期に関する軍記物（語）の系譜の研究２―『奥羽永慶軍記』を中心として―　山形県民俗・歴史論集２）。

さて次に土井利勝が元和九年に鮭延越前に五〇〇〇石、新関因幡へ一〇〇〇石の高禄にて召し抱える際、どのような条件を申し渡したのか、この辺の経緯についても徐々に明確となりつつある。利勝は『このような高禄で遇するのはあくまでも当人のみで、その期間も藩主利勝代に限る』という条件で、世臣とする考えはないというものであった。

この利勝の条件をあっさり受け入れたのは新関因幡であったようである。彼は最上時代鶴ヶ岡城代（現山形県鶴岡市）にあって最上家の蔵入地八万石を預かっており、また自身も藤島において知行六五〇〇石を領し、有能な農務官僚として知られ、特に灌漑事業に功績があり『因幡堰』の名を遺している。新関氏は主家最上氏に代々仕えた世臣の家柄で、久正自身の才覚に加えて一途な奉公実績が認められ要職までに登用されたものと見られる。この新関氏とある面で対照的なのが鮭延氏である。鮭延氏は利勝から当人のみとの申し出に対しては『わが鮭延家は当代までと致す所存』と返答したが、加えて某の生ある間は利勝様御代のみでなく次の御代においても扶持して欲しい。さらに現在随従している家来達（出羽時代からの旧臣）については某（秀綱自身）の亡き後、

みな土井家で直参に召し抱え世臣として遇してほしい。この秀綱からの申し出について土井利勝は基本的に了承している。利勝は柔軟な一面も持っていたことが今日理解されつつある。

新関因幡古河城下に没す

なお久正は寛永一六年～同一九年の間に古河城下で没したことは分かっているが、没年不明で組頭役二三〇〇石であった。その後は嫡男彦六が家督したが家禄は三〇〇石に留まり、藩主利勝が正保元年死去すると、二代藩主利隆には仕えずに土井家を退藩している。これは久正が利勝に仕官する際には、利勝が藩主時代のみという事前に約束があったものと見られている。

鮭延越前古河城下大堤に没す

一方鮭延秀綱は当時既に高齢であったことも関係していると思われるが、身分は客人のまま知行五〇〇〇石も没するまで、そのまま据え置かれた状況で一切変更はなかった。これは土井家内での鮭延秀綱の処遇については、先に藩主利勝の意向のみならず二代将軍秀忠の意向も深く関係するところであり、このため後年なかなか変更が困難であったろうと想像している。鮭延秀綱は正保三年（一六四六）六月二一日古河城下大堤にて没す、行年八五歳。秀綱が死去してもなお、その家来一三名が現存しており、彼らは同年七月一五日土井家へ直参に召し出されている。彼らの待遇は知行高一五〇～三〇〇石の古河藩の中級藩士であった。また家来達は秀綱没後、屋敷址に菩提寺『鮭延寺』を創建し現存している。

最近の土井利勝時代家臣団分限帳と城絵図の調査について

土井利勝時代の各家臣団分限帳と佐倉・古河各城絵図について筆者が調査した結果、佐倉城絵図（古河歴史博物館蔵七万石　時代は元和九年頃）には、当時の佐倉藩士名が記されており分限帳と比肩できる正確さを備えている。これには鮭延越前と新関因幡両氏の屋敷と、その家来達（土井家の陪臣）の屋敷が確認できる。また庭月理右衛門屋敷もあり、彼は本来鮭延越前の家来であるものの、最上家出仕時代鮭延家中に唯一最上家旗本格であったことから、利勝側もその家格を尊重して直参として召し抱えている。さらに新関因幡の嫡男新関彦六の屋敷も見えている。

これが時を経て古河城絵図（現茨城県立歴史館蔵一六万石時代 利勝が正保元年七月没時点のもの　これと同時期の正保分限帳も伝存する）になると、先述した佐倉城絵図とは様相が異なっている。古河城絵図には当時の鮭延越前屋敷は古河城下大堤にあり、同絵図にはこの地域は記されていない。また新関因幡、同彦六各屋敷も既に存していない。しかし特質すべきことは古河城絵図には鮭延氏の家来達が陪臣ではなく、古河藩より直参の家臣団の中に中級藩士として個別に屋敷を与えられて、既に直参に編入されている状況が確認されている。

このことについて『土井系譜・乾』（国立公文書館内閣文庫蔵）や古河藩系譜略（古河市旧渡辺家文書）によれば、鮭延越前の家来達は土井家に直参に召し出された時期は、あくまでも越前死去後の正保三年七月一五日と記している。しかしながら近年の古河城絵図、正保分限帳（利勝が没した正保元年当時のもの）によれば、実質的には、鮭延越前の最晩年頃には土井家に直参に列したことが史実として確認されている。

（古河郷土史研究会会員）

土井利勝下総佐倉藩主時代の
佐倉城絵図の一部
（原図は国指定重要文化財　現古河歴史博物館蔵）

近年の研究によればこの絵図の年代は、土井利勝が最上家浪人鮭延越前、同新関因幡を召し抱えた元和九年直後であることが判明している。

①鮭延越前
②新関因幡
③鮭延越前侍屋敷
④新関因幡侍屋敷
⑤庭月理右衛門
⑥新関彦六の各武家屋敷が確認される。

早川和見　土井利勝研究ノート（12）利勝時代の『佐倉城絵図』について古河郷土史研究会報57号　二〇一九年

最上義光歴史館サポーター
義光会だより
No. 9
2019年3月

題字　齋藤蕉石

一期生六人に「感謝状」

平成三十年三月サポーター十年目に感謝。平成二十年最初の募集生（一期生）が、満十年となり、今迄の活躍に最上義光歴史館より感謝表彰されました。当初十七名でしたが現在は六名。当時は案内のかたわら、特に義光会の組織作り、こども講座の立上げ等に苦労され、数々の企画事業に奮闘実施されました。

現在も益々元気で活躍中。

十一期生の「歓迎会」

平成三十年度、十一期生四名は、養成講座三回を終了。歴史館概要、活動内容、サポート体験等の研修終え実践開始しました。四月十五日「紅の蔵」で歓迎会を行った。新会員の方々の抱負、先輩方々の経験談などで和気藹々、短い時間を楽しんだ。

現在は積極的に楽しんで案内しています。

「霞城観桜会」で賑やかし

四月二十一日～二十二日の二日間。武将隊参加。今年も観桜会開催日の開花状況が心配でした。今年はなんと四月八日にほぼ満開。当日のソメイヨシノは葉桜、堀には花筏、県外の花見のお客様にはなんか申し訳なかった。そば献上式、茶会等イベント開催、満開過ぎて人出は今一、会員の武将隊は人目を引き記念写真にひっぱりだこ。

スキルアップ「現地研修」

九月二十五日　福島・白河方面の企画。

若干少なめ三十二名の参加で雨模様を心配しながら出発。予報通り当地は雨降り、白河の関（奥州三関の一つ。我々、高校野球甲子園での優勝がない東北勢にとって、優勝旗の「白河越え」は悲願とされてきた関）

白河小峰城（東北では珍しい総石垣造りの城。余談ですが一六〇〇年九月、直江兼続が長谷堂城攻略中、上杉景勝に援軍の要請があった。景勝は最上陣の予想外展開の緊急事態に九月二十四日小峰城主・安田上総介能元に命じ、小峰城・二本松城主・守山城主・長沼城主らの兵五千とも八千ともの兵を米沢に向けて出発させた。しかし上杉勢は撤退に追い込まれる事になり、援軍は吾妻山を越える事がなかった。もしも…）

研修旅行（白河小峰城）

二本松城（箕輪門は圧巻、石垣も素晴らしい。城内に豊富な水が流れ、滝や池などが至る所に見られる）現地のボラティアガイドの名案内は、我々の資質向上になった。雨の中ガイドさんには感謝申し上げます。

「山形まるごとマラソン」に声援

十月七日　ランナーに武将隊が激励。台風二五号接近で心配、影響が懸念されたが、マラソン日和となった。霞城公園北門石垣はロケーション最高の場所。勇姿甲冑隊、陣太鼓、旗振りと今までになく多くの会員参加で走者待ち。ハーフ先頭通過九時十五分頃から約三十分「頑張れー」と声援、笑顔のハイタッチで駆けぬけた。最上義光歴史館・甲冑隊のアピール効果利かせる。

街なか賑わいフェスティバル

十月十三日　秋恒例イベント義光会会員参加。肌寒い日だった。午前中から義光公コーナーでクイズ受付、案内、甲冑姿で記念写真を担当。多くの正解者に記念品を差上げた。義光会の本フェス参加交流で、地元の方々が、今まで知らなかったクイズの回答内容で、今度は歴史館に行って本物を見たいと、又指揮棒の重さ体験で驚きもあった。是非御出で下さい。

今年も人気の「こども講座」

郷土の歴史を伝える教育普及事業。

三十年度の市内小学校に出張講座に出向く、こども講座は前年と同じ十二校を計画しました。締切日以後に越えた申込みが有り、講座担当員の体力等の都合で、十二校と決めていたため残念ですが、お断わりしなければなりませんでした。今年は七月から始まり十二月中旬で終了。学校からのアンケート内容と反省会の意見を参考にして、向上に努めたいと思います。講座担当者はもっと多くの学校に出向きたいと意欲も見え、来年度が楽しみ。講座終了後の学校から、仲間同士で又親子での来館が多くなりました。

こども講座

会員の親睦・交流の自主研修

九月　中山城・米沢・前田慶次史跡めぐり。　阿部氏　四名

九月　仙台市博物館で開催された「古代アンデス文明展」に、仙台高速バスを利用して行きました。後、山家家関わりの東一番町も回りました。

佐藤（正）氏　六名

十月　畑谷城跡を現地ボランティアガイドの案内で探究しました。帰路門伝楯・長岡楯・村木沢一帯も探訪しました。

加藤氏　四名

十月　仙台市博物館で開催された「特別展・戊辰戦争百五十年」に仙台高速バスを利用し、帰路国宝・大崎八幡神社も…

佐藤（正）氏　八名

（義光会　会長代行　松本芳雄）

最上義光連歌の世界③

名子 喜久雄

83 さき立つをみちのしるべの雪のくれ　景敏
84 すみかの方は駒いばふなり　玄仍
85 程もなく賀茂のまつりや過ぬらん　義光
86 いまもみそぎにおもふそのかみ　昌叱

慶長三年（一五九八）四月十九日
賦何墻連歌　名残ノ折表

打越（義光の句の前句のさらに前句）の83の句は、「夕暮の雪中で道を失いつつある旅人が、すでにその道を歩んだ人の足跡を便りに、前に進もうとする」ほどの意。冬の旅の辛苦を描いている。

新古今・冬　藤原定家

671　駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

の影響を受けていよう。

84の句が「駒いばふ」としているのは、この和歌を念頭に置いたがゆえのことであろう。ただし、この句の典拠として

胡馬は北風にいななき　越鳥は南枝に巣くふ
（「古詩十九首」）

を加えることができる。馬が自分の故郷から吹く北風を慕っていななく風情である。

羇旅の流れが、85で王朝の夏の有様に転ずる。卯月の中の酉の日に賀茂祭（現在の葵祭）が行われた。その前の午の日または未の日に、賀茂社に奉仕する斎院（未婚の内親王または女王より卜定される）は、賀茂川で禊ぎを行うため、北野の斎館から、一条大路をパレードする。その折、勅使も行列に加わる。華やかなもので、貴顕も男女を問わず争って見物した。源氏物語・葵巻などを参照されたい。

勅使の男性貴族は、当然乗馬である。義光は「住まいの辺りに馬のいななきが聞える。賀茂祭の御禊の行列ももうすぐ終わろうとしている」ほどの付け合いを創造したのである。

ところで、この付け合いで、上記のような思いをめぐらしている作中の人物をどのように想定できるであろうか。

そのヒントとなるのが、86の「みそぎ・そのかみ」の表現である。昌叱は義光の創造した世界を引き継いで、（「みそぎ」は「賀茂祭」に依ること明白）その人物が御禊をかつてのこととして感慨にふける姿を描く。

御禊に最も深く関わる人物は、言うまでもなく賀茂社に奉仕した斎院となろう。昌叱の句により、85・86の付け合いの大意は、「もうすぐ終わってしまうであろう御禊のパレードを耳にしながら、かつて斎院であったころの自分を回想している。」ほどである。（斎院以外の人物との理解も可能である）

王朝文学に、ふさわしい人物を求めれば、光源氏の求愛を拒み通した朝顔斎院（桃園式部卿女）に行きつく。歴史上では、例外的に五代五十七年斎院を勤めた村上天皇皇女選子内親王などが比定される。いずれにしても、義光は、往時を念頭において作句し、昌叱がそれを受け止めたのである。

（山形大学名誉教授）

平成30年度事業

展示事業

○企画展《1月24日－4月1日》
「（第10回）市民の宝モノ2018」

○常設展示Ⅰ《4月4日－7月18日》
「鐵［kurogane］の美 2018」
〈郷土の刀工－月山、水心子正秀、庄司直胤、斎藤清人－〉

○特別展《7月21日－9月9日》
「山形大学附属博物館・最上義光歴史館連携展『山形の祈り』」
～山形大学附属博物館所蔵絵はがき展～」

○常設展示Ⅱ《9月12日－1月20日》
「自然のかたち－所蔵名品障壁画－」

○企画展《1月23日－3月31日》
「（第11回）市民の宝モノ2019」

普及啓発事業（主な事業）

○こども講座
「ヨシアキ☆すく～る!?」～山形の殿様、義光公を知ろう！～
実施校　12校／参加生徒数　683名
講　師　最上義光歴史館サポータークラブ義光会

・7月5日　山形市立第一小学校　四年生
・10月10日　山形市立大曽根小学校　四年生
・10月11日　山形市立千歳小学校　四年生
・10月12日　山形市立南山形小学校　四年生
・10月31日　山形市立鈴川小学校　四年生
・11月7日　山形市立第八小学校　四年生
・11月13日　山形市立金井小学校　四年生
・11月28日　山形市立第七小学校　四年生
・11月30日　山形市立村木沢小学校　四年生
・12月6日　山形市立大郷小学校　四年生
・12月11日　山形市立南小学校　四年生
・12月13日　山形市立第五小学校　四年生

研究余滴⑱

京都から連歌師グループが来た

長谷勘三郎

一六〇〇年代出羽山形の芸文活動が相当に活気を帯びていたことは、最上義光や側近家臣たちの京都での作品を見れば想像できるが、山形における活動の実相が見えないのが物足りなかった。たまたま頁をめくっていた「連歌総目録」頁七四五に、次の記載が見つかって、江戸最初期の山形で、かなり高いレベルの連歌の座が催されていたことが分かった。

総目録の記事はまったくの断片だが、京都文人たちが、山形の吉祥院を会場として連歌の座を催したという、今までに知られなかった記事が出て来たのである。以下「総目録」記載事項の要点を「柿衛文庫本」によって見てみよう。

【開催日時】慶長十九年（一六一四）七月六日
【種　別】百韻
【場　所】最上吉祥院
【発　句】今夜先こころや　逢瀬天の川
【発句作者】昌琢
【脇句作者】善雅
【作者句数】昌琢一三　善雅　八
糸　十　仙厳　十
昌硯　九　慶純　九
元通　八　玄陳　七
了具　九　英知　八
玄的　八　時佐　一

※昌琢の発句以下二十八句のみが残存。
【所　在】国会図書館　連歌合集　第五五冊
柿衛文庫　二一九八
大阪天満宮　六九／二六

記事の要点は以上である。この年は、一月十八日に最上義光が亡くなった。この連歌で発句を詠じた里村昌琢とは慶長四年秋までに京都において三十回の同座が知られており、そのグループとは非常に親密だったようだ。さらに、昌琢は最上の一族東根薩摩らとは書簡によって連歌稽古の交流をつづけていた。その謝礼として、東根からは「紅花」が贈られたこともある。彼らとしては、みちのく最上は遠いけれども心情的には近いものがあったのだろう。

こういう事情から思うに、里村派の連歌師たちが、年の内に山形を弔問した可能性もあるだろう。昌琢は紹巴亡き後の京都連歌界の実力者で、後には江戸幕府連歌所の宗匠として里村南家の初代となった。寛永十三年（一六三六）没。

会場となった吉祥院は最上三十三観音札所の第三番。最上歴代が尊崇した出羽最上の古寺。義光が老母のために御詠歌の額を寄進し、参道に石橋を架けたりもした。京都文人たちの連歌会にふさわしい会席だったのだろう。

平成31年度事業

1．展示事業

(1)特別展

「（仮称）山形大学附属博物館共同企画展」（7月20日－9月8日）

山形大学と連携して大学の附属博物館の収蔵品を学生が選定し、企画から展示まで学生が参加する展覧会です。

(2)常設展示

最上義光を主とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら一部コーナー展示を行います。

①「鐵[kurogane]の美2019」～武士[monono fu]と日本刀～（4月3日－7月17日）
②「（仮称）収蔵名品展Ⅱ」（9月11日－12月15日）
③「（仮称）収蔵名品展Ⅲ」（12月18日－4月5日）

2．普及啓発事業

(1)歴史講座

①こども講座（小学校出張講座）
山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

(2)ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなって、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティーを創出します。（年1回サポーターを募集します）
・「義光塾」
・「現地研修会」

3．開館30周年記念事業

（仮称）最上義光所用「鉄製指揮棒」の復元事業

最上義光所用の鉄製指揮棒を現代の職人が当時の技法で復元制作し、義光が所持した当時の姿を再現します。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の写真

「猿曳駒図」（三面のうち）
山形市指定有形文化財／杉板金地著色
縦二六・〇㎝／横二六・三㎝／厚一・〇㎝
山形市・日枝神社

本資料は、平成十四年に山形市の日枝神社から当館に寄託されたものです。

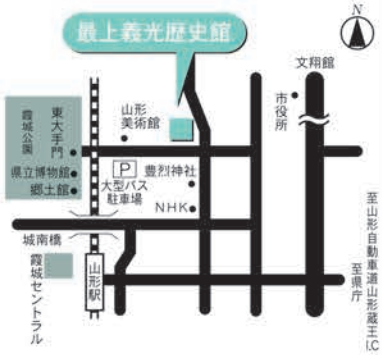
このたび、山形大学学術研究院の佐藤准教授に、山形の近世絵画史に深く関った最上家信（国替後は義俊）と家信が奉納した三枚の絵馬についてご執筆いただきました。

表紙の写真は文中Cの絵馬です。本資料は数少ない最上家ゆかりの絵画資料です。詳細につきましては、2～3ページの論文をご覧ください。

ご利用について

開館時間　午前9時から午後4時30分
入館料　無料
休館日　月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
12月29日から1月3日
交　通　JR山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成31年3月発行
編集・発行　公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990－0046
山形市大手町1－15
TEL 023－625－7101
FAX 023－625－7102
http://mogamiyoshiaki.jp
印　刷　株式会社大風印刷